

## 電子カルテの更新

府立医大に富士通の電子カルテシステムが導入された2008年より5年以上が経過し、データ蓄積ならびにハードウェア劣化に伴い、動作も不確かかつ遅くなってきていましたので、今回、ハードウェア／ソフトウェアともに大掛かりな更新となりました。更新に伴ってサポート終了となるWindows XPからWindows 7へのシステム変更、高速なCPUを搭載したコンピュータや高解像度横長サイズのモニタの導入、富士通の電カルシステムの更新、そして眼科サブシステムもNAVISから最新のNAVIS-ADUにバージョンアップとなりました。

新しい眼科サブシステムでは従来のデータがそのまま完全に引き継がれているのみ

ならず、レイアウトが自由に変更可能な拡張性に優れていること、電カル上のすべてのテキストデータが検索／抽出対象となること、富士通の電カルとの間にSOAP連携がなされていること、投薬情報が自動的にNAVIS側の処方履歴に取り込まれることなど、以前のバージョンに比べていずれも数多くの改良された特徴があります。導入当初には数多くの不具合もありましたが、約1ヶ月を経て徐々に安定した使い易いシステムにカスタマイズされつつあります。特にこれまでなかなか使い切れていなかった電子カルテデータの研究への応用に関して、非常に有用なシステムになっていると思われます。まだ動作の不安定性や速度的な問題点等、解決すべき点も残っていますが、

徐々に良いシステムになってくれることを期待しています。

(文責：眼科電子カルテ担当 森 和彦)



## 神経外科外来の紹介

京都府立医科大学附属病院眼科では、2013年5月に神経眼科外来(毎週金曜日)を開設し、眼付属器から眼球、視神経に至るまで、ほぼ全ての眼科領域に関する専門外来が揃うかたちとなりました。

神経眼科外来では主に視神経疾患、眼球運動障害、眼瞼痙攣といった疾患を診察させて頂いておりますが、原因不明の視機能低下、つまり眼球に一見異常所見を認めないにも関わらず視力低下、視野異常を来している患者さんもよくご紹介頂いております。この様な症例の中には、脳腫瘍、悪性リンパ腫、膠原病といった難治性の疾患が含まれていることもあるので注意が必要です。

また当外来では視神経疾患に関しまして、現在二つの臨床治験を施行しております。一つ目はステロイド抵抗性難治性視神経炎に対する免疫グロブリン大量点滴療法の有効性検討です(近畿大学医学部附属病院、中尾先生主導で行われている多施設共同スタディ)。視神経脊髄炎に代表されるステロイド抵抗性視神経炎に対する有効な治療法は現在のところ血漿交換のみですが、血漿交換は厳密な全身管理が必要なため眼科主導で行うことが困難であり、施設によっては治療至適時期を逃してしまうことがあります。そこで、患者さんの身体的負担も少なく、また眼科主導で施行可能な免疫グロブリン大量点滴療法の有効性検討が開始されました。この新たな治療法の確立は、患者さんのみならず、我々眼科医も切望する所です。二つめは

難治性視神経網膜疾患に対する経角膜電気刺激療法の有効性検討です(大阪大学医学部眼科学教室との共同研究)。経角膜電気刺激療法とは、角膜を介して網膜の神経細胞に電気刺激を加えてこれを活性化するもので、虚血性視神経症、外傷性視神経症、網膜色素変性症といった現在有効な治療法が確立されていない難治性疾患の新たな治療法として期待されています。

医学の進歩は日進月歩ですが、診断に苦慮する疾患、原因不明とされている疾患、難治性の疾患がまだまだ多く存在します。これらの疾患の病態解明に近づき、またこれらの疾患に苦しむ患者さんのQOLを向上させることができるよう、日々の臨床や臨床治験から得られる知見を最大限活用していきたいと考えております。(関山英一)

## 外来クラークの紹介

平成24年度から「外来診療科における医師及び看護師業務の軽減と患者サービス向上」という目的で外来クラークが配置され、病棟・手術場各1名のクラークと共に、現在3名が勤務しています。

主に診察室でのシュライバー業務に携わっていますが、クラークの中にはOMAを有している者もあり、他眼科開業医での経験を活かしながら患者様とのコミュニケーションを大切に、日々仕事をしています。

毎日慌ただしい眼科の外来ですが、先生方や看護師の皆さんに助けをいただきながら「自分たちには何が出来るのか」を考えながら働いています。特に患者様に対しては、どうしても待ち時間が長くなるため先生が来られるまでの間、診察に関することだけでなく

日常の会話をしながら、出来るだけリラックスして診察を受けていただけるようにしています。また、先生方にも気持ちよく診察していただけるように、看護師さんたちと毎朝のカンファレンスで情報を共有しスムーズに連携が取れるように心がけています。

外来ではすべての診察室で同時に診察や検査が進んでいくため、迅速かつ正確な仕事が必要とされます。臨時手術が必要な患者様が来られた時などには、その対応をしつつ他の患者様の診察も並行して進んでいきますので、先生の外来の流れを止めないように手術申込みなどの業務をこなしていく必要があります。先生の説明を横で聞きながら「ということは、あれとあれが必要だな」と先読みして行動をし、看護師さんとは口頭でのやりとりだけでなく専用の指示紙を使って術前検査の案内をお願いするようになど、連絡にもれがないよう工夫しています。

また、様々な専門外来がある分クラークの仕事内容も様々です。先生からの要望も、シュライバー業務の内容も、それぞれの先生ごとに違いがありますのでクラーク間でも常に情報を共有できるように話し合いをもっています。

定期手術の申込みもクラークが行っていますが、患者様とご家族への接遇がより求められるため、慌ただしい中でも丁寧に接するよう心がけています。患者様は、「眼の手術」と聞くだけで緊張や不安を感じておられますので、その場なるべく解消できるように対応しています。

医師や看護師のような資格を持たない私たちが病院という職場でできることは限られていますが、医師・看護師・患者様の橋渡し役として円滑に診療が行われるよう、これからも業務に従事していきたいと思っております。

(小野玲子)

## 編集後記

お待たせいたしました。Eye Treat 革命第18号をお届けします。

これまでと同様、本号でも、長足の進歩を遂げている眼科の革新的治療や府立医大眼科のアクティビティの情報が満載です。隅々までお楽しみください。編集部では、みなさまのご意見を広く募集しております。今後ともどうぞよろしくようお願い申し上げます。(編集部)

EYE Treat 革命 編集部(梶田 牧、永井淑子) 京都府立医科大学 眼科 〒602-0841 京都市上京区河原町通広小路の上梶井町465 TEL: 075-251-5578 FAX: 075-251-5663